

第 45 回 医療薬学公開シンポジウム開催報告

実行委員長 山梨大学医学部附属病院

小口敏夫

平成 23 年 12 月 3 日（土）に山梨大学医学部キャンパス臨床大講堂において、日本医療薬学会主催、山梨県病院薬剤師会および山梨県薬剤師会後援で「第 45 回医療薬学公開シンポジウム」を開催しました。当日は冷たい雨にもかかわらず、東京、茨城、静岡、長野など遠方からの参加もあり 84 名の参加者となりました。

本シンポジウムのテーマは「在宅医療を支える医療薬学」としました。我が国の高齢化率は世界に類を見ない水準となり、現在でも高齢化はさらに進展しています。高齢化社会に対応するための体制整備は喫緊の課題であり、地域住民のニーズに応じて保健・医療・介護・福祉の関係者が連携・協力してサービスを提供する「地域包括ケアシステム」の普及・拡充に向けた動きが注目されています。本シンポジウムでは演者の方々に在宅医療の状況、薬剤師同士あるいは他職種との連携、地域医療連携インフラなどについて、様々な立場からの考え、あるいは先進的な実践事例について紹介して戴き、薬剤師の在宅医療への関わりを議論することを目的としました。

まず、基調講演として、山梨大学医学部麻酔科学講座の飯嶋哲也講師より「電動式 PCA ポンプを用いた在宅疼痛管理システムの構築」について、在宅における疼痛緩和に対する PCA システムの展開について実例を交え、判りやすく御講演戴きました。氏は在宅医療を今後推進するためには「薬剤師」、「社会福祉士」、「看護師」、「医師」などで構成される「地域診療支援チーム」の創設が必要となると結論づけていました。

引き続いて行われたシンポジウムでは千葉大学大学院薬学研究院高齢者薬物学講座の上野光一教授より「千葉県における地域医療連携の現状と薬剤師の関わり」についての講演があり、電子カルテシステムを地域医療に導入することにより糖尿病および脂質異常症に関する検査値が有意に改善したことなど、地域が連携し患者のケアを行うことの重要性を示して戴きました。また、東京女子医科大学病院の伊東俊雅先生からは「在宅医療へ向けた薬薬連携と薬剤師の関わり」について、特に、がん拠点病院に所属する薬剤師の薬薬連携への姿勢について語って戴きました。また、日本調剤株式会社の長谷川寛先生からは『これからの在宅医療』その可能性とは！』と題して、先生ご自身が 20 年来取り組まれてきたチーム医療への薬剤師への関わりについてお話がありました。総合討論では如何に薬剤師のモチベーションを高めるか、また、他職種間でどのように情報を共有すべきかなど、活発な討論が行われ、「職種を超えた情報の共有」が在宅医療を成功させる重要なキーワードの一つであるということを相互に確認しつつ閉会いたしました。